

1 学校における体罰に関する研究

— 攻撃性の観点から —

大河竜介・小川香織・鹿田紀子・森久美子・西山健¹

(要旨)

本研究は、学校における体罰という問題を人間の攻撃性という観点から検討し、体罰の予防・防止に向けた対策を提案することを目的としている。そのためには、教育現場で働く教員の体罰に対する認識を明らかにし、体罰につながる要因の明確化を図った上で体罰を予防・防止する対策とその効果を検討する必要がある。その第一歩として今年度はまず体罰と深いつながりがあると考えられる人間の「攻撃性」を取り上げ検討することを通して、体罰の背景にある要因を明らかにすることを目的とした。研究方法としては、人間の攻撃性に関する文献の講読および議論を通して、体罰や攻撃性についての意見交換を行った。その結果、攻撃性が必ずしも否定的なものではなく、自己防衛や建設的な力としても機能し得ることなどが示された。また、欲求5段階説(Maslow,1943)など、人間現象に関する様々な理論や観点から攻撃性を捉えることにより、人間の攻撃性や体罰に対する多角的な理解が可能となることが示唆された。今後の課題としては、教員を対象とした質問紙調査などを通して、体罰の予防・防止に向けた具体的な対策を検討することが挙げられる。

(キーワード) 体罰、攻撃性、関係性、心的エネルギー、愛着、防衛機制、文化的視点、包括的・多角的理解

I. 問題提起

2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」が施行され幾度かの改正を経るなかで、児童相談所における虐待相談対応件数は、法的な裏づけができたこともあって増加の一途を辿っている(図1)。このように、児童虐待が子どもを取り巻く大きな社会的課題となっている状況下、同法律の第5条に「学校、児童福祉施設、病院その他児童の福祉に業務上関係のある団体及び学校の教職員、児童福祉施設の職員、医師、保健師、弁護士その他児童の福祉に職務上関係のある者は、児童虐待を発見しやすい立場にあることを自覚し、児童虐待の早期発見に努めなければならない」とあるように、児童虐待の早期発見・早期介入、未然防止の取り組みを進めるにあたって学校の果たす役割は大きいと言える。加えて、障害のある子どもは虐待を受けるリスクが高いという指摘(Sullivan, Vernon, & Scanlan, 1987; Ammerman, Van Hasselt, & Hersen, 1988; Westcott, 1991; Ridgeway, 1993; Verdugo & Bermejo, 1995; Merkin & Smith, 1995; Porter, Yuille, & Bent, 1995; Sullivan & Knutson, 1998; Westcott &

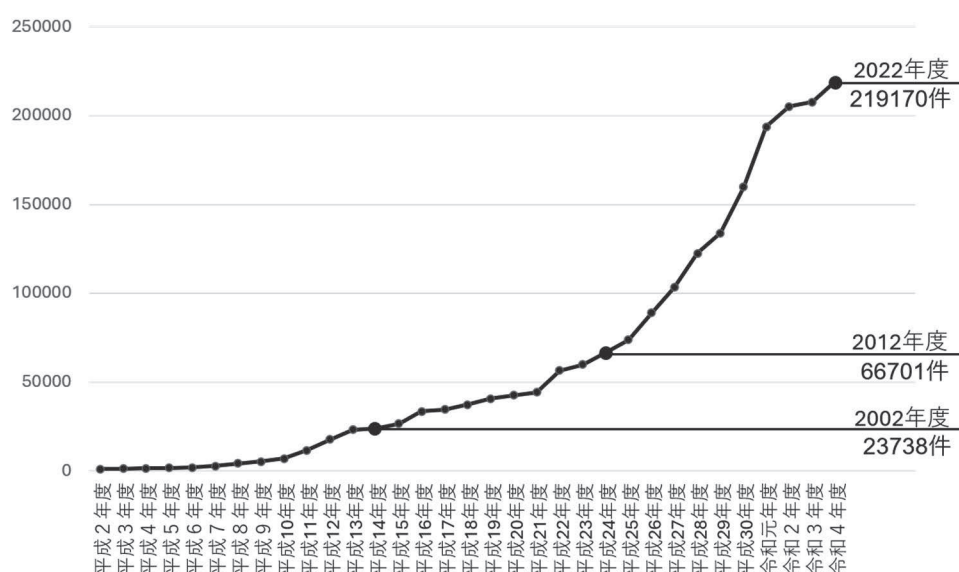


図1 児童相談所における虐待相談対応件数とその推移(こども家庭庁, 2024 から作成)

¹ 大阪教育大学 総合教育系

Jones, 1999; Sullivan & Knutson, 2000; Oosterhoorn & Kendrick, 2001; Paul & Cawson, 2002; Lewis, 2003; Knutson, Johnson, & Sullivan, 2004; Kvam, 2004; Paul, Cawson & Paton, 2004; UNICEF, 2005; Embry & Grossman, 2007; Sebold, 2008; 大野, 2009) に鑑みると、特別支援学校および特別支援学級の果たす役割はとりわけ重要であると考えられる。

一方で、児童虐待の防止・予防に努めるべき学校という場も体罰という暴力の問題を孕んでいる。西山 (2010a) は、教育や支援に関する知識や技術は実践経験を積むなかで徐々に向上していくものであるが、体罰などの暴力に対する感覚はむしろ鈍くなっていく傾向にあることを指摘している。同様に、安藤・小菅 (1994) は、教育学部の大学生に対して体罰に関する質問紙調査を実施し、学年が高くなるほど体罰に賛成する意見が増える傾向にあることを報告している。さらに中村 (2001) は、体罰を肯定したり実際に行ったりする傾向のある者自身が親や教師からの体罰を経験していることを指摘している。この点について、西山 (2010b) は、大学生を対象とした質問紙調査から、体罰経験がある者の方が体罰を肯定する傾向にあり、体罰を暴力と考えない傾向にあることを報告し、体罰の世代間連鎖を防ぐためにも現役教師自らが非暴力の姿勢を示すことの重要性を主張している。

体罰は教育現場において長い歴史をもつ問題であり (中房, 2014; 井上, 2023)、児童生徒の心理的・身体的健康に甚大な影響を及ぼす行為であるにもかかわらず、また戦後の日本においては学校教育法で「体罰を加えることはできない」とされながらも過剰な成果主義のもと黙認あるいは正当化され続けてきた。しかし、近年の研究では、体罰が生徒の学習意欲や自己肯定感を低下させるだけでなく、長期的には暴力的な行動を助長する可能性があることが示されており、例えば文部科学省初等中等教育局長 (2007) は「体罰による指導により正常な倫理観を養うことはできず、むしろ児童生徒に力による解決への志向を助長させ、いじめや暴力行為などの土壌を生む恐れがある」ことを指摘している。また、2020 年の児童福祉法および児童虐待の防止等に関する法律の改正では体罰禁止が明文化された。このような社会の潮流にあっても教育現場からは体罰の事例が報告され続けており、その背景には根強い体罰ポリシーあるいは体罰をやむを得ず容認する姿勢が存在していると考えられる (西山, 2012)。

II. 研究目的

以上のことから本研究では、教育現場で働く専門職である教員の体罰に対する認識を明らかにし、体罰につながる要因の明確化を図り、体罰を予防・防止する対策とその効果を検討することを目的とする。そのために、今年度はまず体罰と深いつながりがあると考えられる人間の「攻撃性」を取り上げ検討することを通して、体罰の背景にある要因を明らかにすることにした。

III. 研究方法

1. 人間の「攻撃性」に関する文献講読

攻撃性について理解するための参考文献として以下の 2 本の論文を講読して内容を共有した。

- ・足立奈歩 2003 攻撃性に関する先行研究の概観 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 442-454.
- ・岡田博名・桂田恵美子 2013 なぜ人は攻撃するのか ― 攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連 ― 関西学院大学心理科学研究, 39, 37-42.

2. 体罰や攻撃性についての議論

毎月 1 回定例で約 1 時間の集まりを持ち、共同研究者間で体罰や攻撃性について意見交換をすることとした。対面で参集することを基本としたが、Zoom ビデオコミュニケーションズの Web 会議システムを活用してミーティングを行うこともあった。毎回動画や板書で集まりの記録を残し見返せるようにした。

IV. 研究結果

1. 人間の「攻撃性」に関する文献講読

体罰や人間の攻撃性について議論するにあたり、特に後者における一定の共通認識および議論の指針を得るために、人間の攻撃性に関する過去の研究知見を概観することにした。具体的には、人間の攻撃性を取り上げている上記の 2 論文を講読した。それぞれの概要については以下のとおりである。

1) 足立奈歩 (2003) の知見

人間の攻撃性を心理学・動物行動学など多様な分野から捉えた論文で、心理臨床における視点を中心に攻撃性について検討している。攻撃性は、心理学だけでなく他の学問分野においても議論され、状況依存

的かつ多義的に用いられてきた概念であるとし、攻撃性の概念を整理して、その多面的な捉え方を検討することは人間現象の理解に寄与するとの観点から以下のようにまとめている。

(1) 動物行動学における知見

動物の攻撃性は種の保存や社会的秩序を維持するための本能と理解される。動物における攻撃性は種内闘争としてテリトリーの確保や子孫の防衛、順位制の維持などの点で健全な働きをする（自己保存的要素）。一方、種内闘争が種外環境を無視した場合は破滅に至る危険もある（自己破壊的要素）。そのため、動物には抑制機能としての「闘争の儀式化」という仕組みが備わっている。

(2) 人間との共通性と差異性

動物と人間の攻撃性には共通点があるものの、「人間が精神的存在である」が故に状況は以下のように複雑である。

①同一視の能力→他者の苦痛を感じることができるとサディズムが生まれる。

②投射の能力→自己防衛のため他者を攻撃する。

③時間展望の能力→妄想的な憎悪を他者に向ける。

(3) 心理学領域における攻撃性の実証研究

内的衝動説、情動発散説、社会的機能説という3つの立場がある。

①内的衝動説：攻撃性を内発的なエネルギーの現れと考える立場（敵意や怒りの研究）。

②情動発散説：外的な要因（フラストレーションが生じるような不快な経験）への反応として内的に攻撃動機が生まれると考える立場。

③社会的機能説：攻撃的行動が社会的に学習され、目的を達成するための手段、あるいは葛藤場面などにおける認知処理過程として用いられると考える立場。

(4) 心理臨床における攻撃性の理論

攻撃性は心のエネルギーとして位置づけられ、Freud,S.は欲動理論に基づいて攻撃性を性的性質をもつ心のエネルギーとして捉えてリビドーとの関連を強調し、Jung,C.G.は心のエネルギーは多様な経路をもっているとし個人的無意識および普遍的無意識との関連を重視した。

上記以外にも、文化的視点からの理解（たとえば、紛争などの社会的状況における理解）、関係性の観点からの理解（愛着理論や依存・自立の二面性からみた理解）も重要である。

(5) まとめ

攻撃性は、人間が有する「心のエネルギー」と捉えることが可能であり、その心のエネルギーがどのように育ち、どのように機能するかという点については、人間をどのような存在と捉えるか（人間の独自性をどこに求めるか）によって変わってくる。攻撃性は必ずしも破壊的・機能障害的な力とは限らず、建設的・能動的な力にもなり得る。つまり、攻撃性の多義的な側面を理解し、より包括的な人間理解をめざすことが重要である。

2) 岡田・桂田 (2013) の知見

人間の攻撃性を愛着スタイルおよび防衛機制との関連から検討した論文で、大学生 395 名を対象に質問紙調査を実施した結果、愛着スタイルと攻撃性・防衛機制との間には関連があり、愛着スタイルが不安定な人ほど攻撃性と未熟な防衛が高い傾向にあることが明らかとなった。また、攻撃性は自己防衛の一形態として機能し得る可能性がある、つまり攻撃行動は自己防衛手段として使用される可能性があることが示唆された。

2. 体罰や攻撃性についての議論

1) 体罰について

本校では毎年全教員に対して、体罰防止を目的とした自己チェックシートを用いたアセスメントを行っている。その中で記述される体罰の定義、質問項目などの文言の妥当性について検討を行った。その際、共同研究者それぞれのかつての勤務校なども引き合いに出して意見交換を行った。「被体罰経験」の有無で体罰を肯定的に捉える割合が変わる（中村, 2001; 西山, 2010b）ことも考えられるため、教員向けに体罰に関する意識調査を行ってみてはどうかとの方向性が共有された。懲戒を行う際に「身体に対する行為」「人格を否定する発言」「精神的につらい状態にする発言」などが体罰や不適切な行為に該当する（東京都教育委員会, 2014）ことは広く知られているが、それらに加えて「精神的に追い詰めるような場を設定すること」なども不適切なかかわりであると考えられるが、どのように定義すべきなのか難しいという課題も共有された。

ちなみに、文部科学省（2007）は体罰について「学校教育法第 11 条に規定する児童生徒の懲戒・体罰に関

する考え方」において以下のような見解を示している。

- (1) 児童生徒への指導に当たり、学校教育法第 11 条ただし書にいう体罰は、いかなる場合においても行ってはならない。教員等が児童生徒に対して行った懲戒の行為が体罰に当たるかどうかは、当該児童生徒の年齢、健康、心身の発達状況、当該行為が行われた場所的及び時間的環境、懲戒の態様等の諸条件を総合的に考え、個々の事案ごとに判断する必要がある。
- (2) (1) により、その懲戒の内容が身体的性質のもの、すなわち、身体に対する侵害を内容とする懲戒（殴る、蹴る等）、被罰者に肉体的苦痛を与えるような懲戒（正座・直立等特定の姿勢を長時間にわたって保持させる等）に当たると判断された場合は、体罰に該当する。
- (3) 個々の懲戒が体罰に当たるか否かは、単に、懲戒を受けた児童生徒や保護者の主観的な言動により判断されるのではなく、上記（1）の諸条件を客観的に考慮して判断されるべきであり、特に児童生徒一人一人の状況に配慮を尽くした行為であったかどうか等の観点が重要である。
- (4) 児童生徒に対する有形力（目に見える物理的な力）の行使により行われた懲戒は、その一切が体罰として許されないというものではなく、裁判例においても、「いやしくも有形力の行使と見られる外形をもった行為は学校教育法上の懲戒行為としては一切許容されない」とすることは、本来学校教育法の予想するところではない」としたもの（昭和 56 年 4 月 1 日東京高裁判決）、「生徒の心身の発達に応じて慎重な教育上の配慮のもとに行うべきであり、このような配慮のもとに行われる限りにおいては、状況に応じ一定の限度内で懲戒のための有形力の行使が許容される」としたもの（昭和 60 年 2 月 22 日浦和地裁判決）などがある。
- (5) 有形力の行使以外の方法により行われた懲戒については、例えば、以下のような行為は、児童生徒に肉体的苦痛を与えるものでない限り、通常体罰には当たらない。
 - 放課後等に教室に残留させる（用便のためにも室外に出ることを許さない、又は食事時間を過ぎても長く留め置く等肉体的苦痛を与えるものは体罰に当たる）。
 - 授業中、教室内に起立させる。
 - 学習課題や清掃活動を課す。
 - 学校当番を多く割り当てる。
 - 立ち歩きの多い児童生徒を叱って席につかせる。
- (6) なお、児童生徒から教員等に対する暴力行為に対して、教員等が防衛のためにやむを得ずした有形力の行使は、もとより教育上の措置たる懲戒行為として行われたものではなく、これにより身体への侵害又は肉体的苦痛を与えた場合は体罰には該当しない。また、他の児童生徒に被害を及ぼすような暴力行為に対して、これを制止したり、目前の危険を回避するためにやむを得ずした有形力の行使についても、同様に体罰に当たらない。これらの行為については、正当防衛、正当行為等として刑事上又は民事上の責めを免れうる。

2) 攻撃性について

上記の文献講読を踏まえ、攻撃性という言葉の受けとめについて共同研究者間で意見交換を行った。

その結果、「攻撃性は発酵と腐敗のような関係。相手の受け止め方によって意味が変わる」「人とかかわるときに『人を変えたい』と思うことがそもそも攻撃性ではないか。イソップ寓話『北風と太陽』は、北風にも太陽にも、その行為に攻撃性を感じる」「自傷行為も広くとらえると自分への攻撃性ではないか」などの意見が出された。そこから「いじりの文化」「いじめといじりの違い」にまで話が及び、いじりには地域性があることや、いじめといじりの線引きの難しさ、教員が生徒をいじることの影響の大きさや影響が遅れて発現するのではないかといった遅延性なども話題に上がった。

また、攻撃性の制御可能性に関する発言もなされた。制御可能な面としてはスポーツや自分を守る行動、文化的に認められる場合というような例が挙げられた。置かれている環境や文化の価値観によって攻撃性が容認されるように、体罰が容認される雰囲気や風土が集団によって創生される危険性があることが改めて確認された。制御可能な面については、理性的に攻撃をするという「意図的（悪意）」と捉えられる状態があることも指摘された。制御不可能な面については、均衡を保とうとするホメオスタシスの側面、異質なものを排除しようとする側面など、無意識の作用と考えられる点があるとの発言があり、制御不可能な面は「本能的」と言い換えられるかもしれない。一方、制御可能な面は「理性的」な性質を有しており、意識が強く作用する攻撃性の側面と捉えることが可能である。

V. まとめと課題

攻撃性に関する過去の研究知見から、攻撃性は必ずしも否定的な捉え方をされるものではなく、肯定的な側面も有する多義的な概念である（足立, 2003）ということが再確認された。そして、攻撃性は自己防衛の一形態としても機能し得る可能性がある（岡田他, 2013）ことも明らかとなった。それらを踏まえた上で、体罰あるいは攻撃性について議論するなかで明らかとなっていたのは、攻撃性という言葉ひとつをとっても一人ひとりがもつイメージは全然違っているということである。さらに議論を進めるなかで、それぞれが思い浮かべる攻撃性という概念についての相互理解が促進され、ある程度の共通認識がもてるようになり、学校における体罰という事象を捉える端緒が得られたように思う。

一例として、Maslow (1943) の欲求5段階説の観点から人間の攻撃性を捉えてみた。ある特定の欲求が満たされていない状態は、人間に意欲・努力行動を喚起する可能性がある一方で、自己や他者に対する攻撃行動を生起させるかもしれない。つまり、「生理的欲求」は本能に基づく攻撃性に、「安全欲求」は自己防衛意識に基づく攻撃性に、「社会的欲求」は帰属意識に基づく攻撃性に、「承認欲求」は自尊心に基づく攻撃性に、「自己実現欲求」は成長追求に基づく攻撃性にそれぞれ昇華され、それは時にポジティブな行動となり、時にネガティブな行動となって発現するであろう。このように、人間現象に関する様々な理論や観点から攻撃性を捉えることにより、人間の攻撃性や体罰に対する多角的な理解が可能となると考えられる。

今後の課題としては、より多角的な視点から教員における攻撃性および学校における体罰という事象を捉え、体罰の予防・防止に向けた方策を検討する点が挙げられる。具体的には、体罰に関して本校でこれまで蓄積してきたデータを多角的に分析するとともに、教員を対象として体罰の予防・防止に資する質問紙調査を作成・実施し、最終的にはその結果から具体的な体罰予防・防止の方策を提言する予定である。

VI. 引用・参考文献

- 足立奈歩 2003 攻撃性に関する先行研究の概観 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 442-454.
- Ammerman, R.T., Van Hasselt, V.B., & Hersen, M. 1988 Maltreatment of handicapped children: A critical review. *Journal of Family Violence*, 3, 53-72.
- 安藤房治・小菅ゆみ 1994 学校における体罰に関する一考察 ― 教育学部学生の体罰体験と体罰意識調査をもとに ― 弘前大学教育学部紀要, 72, 69-89.
- Embry, R.A. & Grossman, F.D. 2007 The Los Angeles country response to child abuse and deafness: A social movement theory analysis. *American Annals of the Deaf*, 151, 488-198.
- 井上滉人 2023 ルネサンス期人文主義者の教育言説における体罰と規律の諸相 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 143, 79-95.
- Knutson, J.F., Johnson, C.R., & Sullivan, P.M. 2004 Disciplinary choices of mothers of deaf children and mothers of normally hearing children. *Child Abuse & Neglect*, 28, 925-937.
- こども家庭庁 2024 児童相談所における虐待相談対応件数とその推移
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/a176de99-390e-4065-a7fb-fe569ab2450c/12d7a89f/20230401_policies_jidougyakutai_19.pdf (2025年1月15日最終閲覧)
- Kvam, M.H. 2004 Sexual abuse of deaf children: A retrospective analysis of the prevalence and characteristics of childhood sexual abuse among deaf adults in Norway. *Child Abuse & Neglect*, 28, 241-251.
- Lewis, V. 2003 *Development and disability*. (2nd Ed.) Oxford: Blackwell Publishing.
- Maslow, A.H. 1943 A theory of human motivation. *Psychological Review*, 50, 370-396.
- Merkin, L. & Smith, M.J. 1995 A community based model providing services for deaf and deaf-blind victims of sexual assault and domestic violence. *Sexuality and Disability*, 13, 97-106.
- 文部科学省初等中等教育局長 2007 問題行動を起こす児童生徒に対する指導について（通知） 18文科初第1019号（平成19年2月5日）
- 中房敏朗 2014 体罰の歴史的背景 大阪体育大学紀要, 45, 199-207.
- 中村敏秀 2001 援助者の体罰に関する意識についての一考察 ― 知的障害児施設の援助 職員の縦断的調査から ― 長崎国際大学論叢, 1, 433-441.
- 西山 健 2010a 教育・福祉の専門職による暴力に関する一考察 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 32, 59-70.

- 西山 健 2010b 児童虐待および体罰に関する大学生の意識調査（Ⅱ）——性別・授業経験・体罰経験の観点から—— 発達人間学研究,12,11-16.
- 西山 健 2012 教員養成課程大学生の児童虐待に関する意識調査 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 34, 61-70.
- 岡田博名・桂田恵美子 2013 なぜ人は攻撃するのか——攻撃性と愛着スタイル及び防衛機制との関連—— 関西学院大学心理科学研究, 39, 37-42.
- 大野貴子 2009 障害児と虐待 小児の精神と神経,49,33-36.
- Oosterhoorn,R. & Kendrick,A. 2001 No sign of harm: Issues for disabled children communicating about abuse. *Child Abuse Review*,10,243-253.
- Paul,A. & Cawson,P. 2002 Safeguarding disabled children in residential settings: What we know and what we don't know. *Child Abuse Review*,11,262-281.
- Paul,A.,Cawson,P.,& Paton,J. 2004 *Safeguarding disabled children in residential special schools*. London: National Society for the Prevention of Cruelty to Children (NSPCC).
- Porter,S.,Yuille,J.C.,& Bent,A. 1995 A comparison of the eyewitness accounts of deaf and hearing children.*Child Abuse & Neglect*,19,51-61.
- Ridgeway,S.M. 1993 Abuse and deaf children: Some factors to consider. *Child Abuse Review*,2,166-173.
- Sebald,A.M. 2008 Child abuse and deafness: An overview. *American Annals of the Deaf*,153,376-383.
- Sullivan,P.M.,Vernon,M.,& Scanlan,J.M. 1987 Sexual abuse of deaf youth. *American Annals of the Deaf*,132,256-262.
- Sullivan,P.M. & Knutson,J.F. 1998 The association between child maltreatment and disabilities in a hospital-based epidemiological study. *Child Abuse & Neglect*,22,271-288.
- Sullivan,P.M. & Knutson,J.F. 2000 Maltreatment and disabilities: A population-based epidemiological study. *Child Abuse & Neglect*,24,1257-1273.
- 東京都教育委員会 2014 体罰の定義・体罰関連行為のガイドライン
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/physical_training_and_club_activity/files/release/20140123_02/shiryou1.pdf (2025 年 1 月 15 日最終閲覧)
- UNICEF 2005 *Violence against disabled children*.
- Verdugo,M.A. & Bermejo,B.G. 1995 The maltreatment of intellectually handicapped children and adolescents. *Child Abuse & Neglect*,19,205-215.
- Westcott,H. 1991 The abuse of disabled children: A review of the literature. *Child: Care, Health and Development*,17,243-258.
- Westcott,H.L. & Jones,D.P. 1999 Annotation: The abuse of disabled children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*,40,497-506.
- Wikipedia 北風と太陽
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%97%E9%A2%A8%E3%81%A8%E5%A4%AA%E9%99%BD%E3%81%82%E3%82%89%E3%81%99%E3%81%98> (2025年1月15日最終閲覧)